

港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

## 港区ゆかりの浮世絵師

—うたがわくになが  
歌川国長と山岸家—

神谷 蘭

(元港区立郷土歴史館学芸員)

2025年のNHK大河ドラマ「べらぼう」は、江戸時代中期から後期にかけて活躍した版元・<sup>つた やじゅうざんろう</sup>蔦屋重三郎(1750-1797)が主人公です。一流の作家らと組みヒット作を連発し、絵師の発掘・プロデュースも行うなど、幅広く活動した人物として知られる蔦屋が店を構えた日本橋は、江戸の交通・物資・情報の拠点であり、活気溢れる場所でした。大店と呼ばれる有力な書物問屋や地本問屋(錦絵や草双紙を出版する版元)もここに多く集まっていました。一方、日本橋だけでなく、東海道の隣接する盛り場であった港区の芝神明宮(芝大神宮)周辺にも地本問屋が集中し、活発な活動を行っていました。浮世絵出版の代表的版元である和泉屋市兵衛をはじめ、名前が知られているだけでも6軒以上の地本問屋が店を構えています。

そのような地域柄、芝周辺(現在の芝大門一丁目周辺)には絵師も多く住んでいたことがわかっています。浮世絵の一大流派である歌川派の祖・豊春(1735-1814)は芝三島町に住みました。隣接する宇多川町から、他の浮世絵の流派の菱川、宮川、勝川などにならって「歌川」の画姓を称したといわれています。豊春の弟子の豊国(1769-1825)も芝三島町で生まれており、同じく弟子の豊広(生年不詳-1829)とその息子の豊清(1799-1820)は芝片門前町に住んでいました。二代勝川春好(生没年不詳)は芝中門前町と芝神明町に住んでいたことがあります。さらに港区域全体に視野を広げると、<sup>しば こうかん</sup>司馬江漢(1747-1818)、<sup>けいさい えいせん</sup>歌川国満(生没年不詳)、<sup>よしかず</sup>溪斎英泉(1791-1848)、<sup>しん ぶん</sup>歌川芳員(生没年不詳)、<sup>しん ぶん</sup>歌川芳秀(1832-1902)、二代歌川広近(1835-没年不詳)、小林清親(1847-1915)、<sup>ぼうざいしゅうげつ</sup>望斎秀月(生没年不詳)、田口米作(1864-1903)が住んでいたことがあります。また明治時代以降には織田一麿(1882-1956)、川瀬巴水(1883-1957)が生まれ育っています。それぞれ生活していた時期は異なりますが、たくさんの港区ゆかりの絵師がいることがよくわかります。

歌川国長(生年不詳-1827)は、特に地域とのつながりを見出すことができる絵師です。芝口三丁目(現在の新橋三丁目、東新橋一丁目)に住んでいたことがあり、名所や美人画、役者絵などを描いたことが知られています。一風変わった作品として、エジプトのピラミッドやロドス島の巨人を描いた「新板阿蘭陀浮画」のシリーズが和泉屋市兵衛から出されており、ここにも芝周辺のネットワークを見ることができます。

郷土歴史館では国長による肉筆肖像画「山岸家中興之像」を所蔵しています。この肖像画は、大正時代頃までお菓子の焼き型を作っていた山岸家の三代目が文化14(1817)年に死去した際に作られました。山岸家も国長と同じ芝口三丁目で商売を行っていたため、おそらくその縁で肖像画の依頼があったと考えられます。商家と絵師のご近所同士の交流を知ることのできる貴重な作例です。

山岸氏は武士ではありませんが、肖像画のためか帯刀しています。少し垂れ下がった眉に頭頂の方まで長く刻まれた眉間の皺、唇を食いしばったような様子からは、緊張が伝わってくるようです。また、座している敷物は、花や葉の一つ一つが細かく描かれています。国長の肉筆画は現存作例が多くなく、比較検討は難しいですが、この肖像画からは彼の力量を十分見ることができます。国長の個別研究において、また芝周辺の地域史を考えるうえでも、大切な資料の一つだといえるでしょう。



歌川国長「山岸家中興之像」  
文化14(1817)年 当館蔵



港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

## 町人の肖像画

—箱書きから読み解く生業—

石田 七奈子

(学芸員)

**写** 真技術が広がり始めた江戸時代末期以降、その時代に生きた人びとの姿が数多く写されてきました。写真はその人の死後も姿が鮮明に残るため、故人を偲んで飾る遺影としても用いられるようになります。では、写真が無い時代はどうしていたのでしょうか？その答えの一つが肖像画です。

肖像画は仏教に関連して中国から伝わり、奈良時代には日本でも僧侶が、平安時代後期には僧侶以外にも描かれるようになりました。江戸時代には将軍や大名などの武家が数多く描かれ、学者や商人などの町人も描かれています。日本では、肖像画の多くが遺族の要請で描かれ、法要など極めて内々<sup>ほうよう</sup>の場で飾られました。描かれた人の家業や親交など弔いに不要な情報は記されないことが多く、生前の様子を知るには他の資料が必要です。しかし、資料が比較的豊富な武家に比べて町人の資料は多くありません。

表面の vol.24-1 で紹介した「山岸家中興之像」<sup>やまぎし けいちゅうの ぞう</sup>も、そんな町人の肖像画の一つです。箱書きには、大正9(1920)年9月23日付で、山岸家は200年前から江戸で鍛冶業を営み、肖像画の人物は文化14(1817)年8月6日に亡くなった三代目で同家を興隆させた中興の祖であること、代々鍛冶屋長七を襲名し、天保年間(1830～1844)に形屋長七と改称、明治初年に山岸と改めたことなどが記されています。

鍛冶屋(形屋)はこの箱書きが記される2年前に亡くなった山岸唯次郎氏<sup>ただじろう</sup>(1872-1918)の代で廃業しました。現在、当館では肖像画の他、店で用いた明治時代のお菓子の金型の下絵帳を収蔵しています。しかし同家の江戸時代の資料は他に無く、肖像画が描かれた当時の詳細を知ることは出来ません。

鍛冶屋、形屋という屋号から推察すると、金属加工を生業とする職人の家で

あったようです。鍛冶<sup>かたな</sup>という刀を思い出しますが、台所用の包丁をはじめ、畳屋<sup>たたみ</sup>が使う畳包丁や紙を裁断する紙裁包丁<sup>かみたち</sup>、板木を彫る彫刻刀なども鍛冶屋が造りました。

この絵を描いた浮世絵師・歌川国長<sup>うたがわくになが</sup>と長七は同じ芝口(現在の新橋辺り)に住んでおり、芝口の南には浮世絵を製造販売した地本問屋が並ぶ芝神明町などがありました。近所に加え、長七の生業も国長が描くことになった縁の一つだったかもしれません。

三代目の死後、天保年間には形屋と改称しますが、明治時代には煎餅<sup>せんべい</sup>の金型の専門店であったことを示す広告も残っていることから、鍛冶業から金型製造業に転換した可能性があります。江戸時代は塩気のある煎餅ではなく、生地を金型に入れて焼いた瓦煎餅のような甘い煎餅が主流でした。芝口では蟹屋の唐松煎餅が有名で、芝口を描いた浮世絵にも松の模様がある「かにや」の煎餅が描かれています。東海道沿いで江戸城下の中心地へつながる芝口は、武家屋敷も近く、菓子の需要は高かったと考えられます。長七は、そうした菓子屋を支える金型の職人として家業を続けたのかもしれません。

箱書きは、肖像画が描かれた文化14年から100年以上後に記されたため当時の状況は明確に記されていませんが、資料が少ない中で江戸時代の生業を推測させてくれる貴重な情報です。

参考

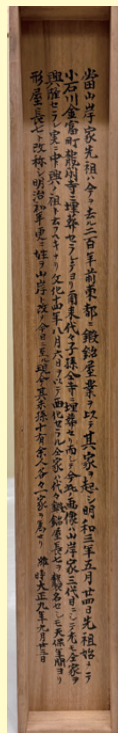
宮島新一『肖像画』(1994年、吉川弘文館)

大坪潤子「お菓子のカタチ 形屋長七『萬形下絵帳』」『資料館だより』63号

今村規子「資料に見る和菓子 第五回 団扇絵」『あじわい』201(2018年)



上:「江戸の花名勝会 芝口  
日比谷稲荷初午」文久3(1863)年  
下:同上、左下拡大部分



箱書き